【 11 】

氏　　名　伊原木　大　祐（いばらぎ　だいすけ）

学位(専攻分野)　博　士（文　学）

学位記番号　文　博　第　417　号

学位授与の日付　平成20年3月24日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻

学位論文題目　レヴィナス研究
——犠牲と身体性の宗教哲学へ向けて——

論文調査委員　（主査）准教授　杉村靖彦　教授　氣多雅子　准教授　芦名定道

論文内容の要旨

本博士論文の中心的な課題は，二十世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの思想を「犠牲と身体性」という主題に即して読み解いてゆくことにある。レヴィナスは，非暴力を軸とした「他者との関係」を構想しつつ，ヘブライ的な聖潔（sainteté）に基づく倫理ないし宗教の観念をうち出した哲学者である。しかし，その非暴力の理念から一切の暴力性が抜き去られているという保証はどこにもない。むしろ，レヴィナスの思想においては，自我の暴力から区別される肯定的暴力，つまり他性に由来する特殊な力の発露が論じられているのではないか。まさにこうした視点を確証してくれるのが，犠牲という主題である。ただし，レヴィナスの想定している犠牲は，ルネ・ジラールが提起していたような一定の共同体における排除的犠牲（スケープゴート）のシステムを意味しない。レヴィナスにおける犠牲は，第三項の排除に抗するような自己犠牲の問題として捉えられている。しかも，それは，あらゆる経験的な犠牲に先立って，犠牲可能性のようなものとして身体に埋め込まれた自己犠牲にまで突き詰められている。だが，そうしたラディカルな犠牲概念を最初から一挙に提示するならば，あまりに形式的で独断的な思弁に行き着いてしまう危険性がある。本論文では，レヴィナス解釈における形式性と独断性という二つの陥穽を回避すべく，その犠牲論を身体性という角度から照射することで自己犠牲の実質的な意味を探索している。この身体性というテーマは，レヴィナス思想の形成史的観点から見ても，また，その源にある現象学およびユダヤ一神教の観点から見ても，極めて重要な意味をもつものである。

以下，6つの章と結論からなる本論文について，各章の内容を要約しつつ全体の流れを辿っていく。

犠牲についての原理的考察は，犠牲が犠牲者の存在なしには成り立たないという事実から出発する必要がある。存在者の存在を初めから所与のものとして記述を進める実証的な諸学とは異なり，哲学は，その犠牲となる存在者の存在に問いの端緒を置かねばならない。そこで第1章では，いかにして「ある（il y a）」という純粋存在から一存在者が「私」として生成してくるのかを正確に描き出すことから始める。レヴィナスの主著『全体性と無限』の分析においては，この私がさしあたり私の生，私のための生として，自我固有のエゴイズムとして記述されている。そして，こうした生のエゴイズムの基礎には「享受」という概念が位置している。ここでは，ハイデガーの主著『存在と時間』における道具連関分析との対比で，享受の基本特徴が解明される。それによって得られたのは次のような洞察である。すなわち，エゴイズムの基礎にある享受は，あくまで糧という他物の享受でしかないため，自我の純粋な独立を意味するものではない。この状況をレヴィナスは「依存による独立」という表現で示した上で，さらにそのような構造を有する自我の性格を「欲求」という術語で表している。欲求は，他者への欲望とは対照的に，世界の諸事物を経由しながらも自己回帰を達成するような〈同じもの〉の運動である。欲求の運動は，レヴィナスが「享受の志向性」と呼ぶ現象学的概念と深く関わっている。この新たな志向性概念は，フッサールによって客観化作用と名づけられた「表象の志向性」以上に根源的なものとして提示される。表象の志向性が〈同〉による〈他〉の一方的規定であるのに対し，享受の志向性は，自我が世界の他物によって規定されながらも他物を規定するような関係であり，これは地上への身体的な自己定位によって具現される。そこに見いだされるのは「依存による独

立」の構造そのものである。

前章における主な分析対象は，自我が何らかの事物によって生きる仕方，すなわち「糧の享受」という原初の出来事であった。第2章の主題は，糧が享受される場所の問題へと移行する。『全体性と無限』は，自我を取り巻く環境に対して「元基」という呼び名を与えていたが，その内実は以下の三点にまとめられる。第一に，元基は無規定的であるが，有限／無限のいずれの項にも入らない。第二に，元基の享受は自我を溶解するのではなく，自我を確立する。第三に，元基の無規定性は生の享受を不安定化する。けれども，人間独自の欲求はこのような不安定化に対抗して，未来の不安を乗り越えようとする。それゆえ，自我は「労働」と「所有」に訴えるのである。ただし，労働と所有の実行には，「住居」という決定的な前提条件が要請される。住居への集約は，他から分離した私の内部性を最もよく具象化したものであって，享受の感性よりも高次の自己定立を示唆している。レヴィナスが特異な他者概念を導入するのは，この場面においてである。その他者こそ，家の中で自我と親密な関係を結ぶ迎接者である。この迎接者を「女性的なもの」と命名したことから生じる議論の男性中心主義的な偏りは否定すべくもないが，そうした他者概念には，硬直した道徳的自他関係の設定を打ち崩すような可能性が秘められている。以上を踏まえて，身体に関する考察を進めると，新たに「意志」という問題が浮かび上がってくる。身体活動としての労働は，意志のはたらきと密接に連関しており，それはまた時間的猶予の産出に貢献している。このような意志は，享受としての感性を基盤に置きながらも，それを越え出た欲求の進化形態として定義される。

第3章では，生のエゴイズムよりも善性を優先させるようになる転回点を，私の「意志」という観点から追跡する。身体的意志が労働を行うことによって生み出す作品は，市場のメカニズムに統合されることで，生産者の内面を解消してしまい，非人称的なものと化す運命にある。この作品の特性を言語との対比で読み解くのが，第3章の前半部における目標である。ここでの言語は自己自身の現前性を表すものとして定義されている。『全体性と無限』においては，自我の現出の有無が，言語と作品とを区別する最大のメルクマールなのである。自我が現出しないという作品の特性は，意志による統御の不可能性，言い換えると，意志の脆弱性に通じている。そうした脆弱性は，明らかに身体的な意味を有しており，意志が暴力と死によって，あるいは他者によって絶えず脅かされていることを暗示する。しかしまた，意志には独自の抵抗能力が備わっており，これによって，死を未来において把握するという自己防衛が可能となる。そうした防衛能力をも破綻させる究極の契機が，意志の現在を襲う「苦しみ」である。苦しみの極限における忍耐において，意志は，それまで保っていたエゴイズムの殻を突き破り，自らの重心を外部の他者に移しつつ，他者への欲望に転化する。この劇的な転換を客観的に保証するものとして，『全体性と無限』は「神の裁き」という擬似神学的な概念を持ち込んでいるが，そこに何らかの非哲学的な信仰告白を読み取るべきではない。「歴史の裁き」がその普遍性によって意志を抹殺してしまうのに対し，逆に「神の裁き」は，意志の発言権を確保しつつ，他者に対する責任を惹起する。後者は，あくまで倫理的かつ相互人間的な哲学概念として理解すべきものである。

以上のレヴィナス読解において，欲求のエゴイズムから欲望の自己犠牲への反転という事態が示された。ところが，この反転は意志のレベルで生じたものでしかない。意志よりも深層にあると仮定された感性のレベルは，その場合にどうなっているのか。第4章で浮かび上がってくるのは，このような問題意識である。したがって，他者との関係に内属すべき犠牲の概念を，意志のレベルではなく，それより根源的な感性のレベルで取り押さえなければならない。『全体性と無限』以降のレヴィナスが取り組んでいる課題の一つはその点にある。こうした犠牲の根本概念は，後期レヴィナス思想において「身代わり」という呼称でもって提出された。それを単に形式的な術語に貶めることなく，その実質的な深層を掘り起こしてゆくことに本論文の最終的な目標がある。だが，そのためには，身代わりの前提となる「近さ」という考えを把握しておかねばならない。近さとは，「存在」の彼方ないし手前において機能する自他関係および自己性の名称として用いられる。ここで言われる「存在」は，『存在の彼方へ』の中で，言語的かつ時間的な脱自‐統合構造を付属した「存在と存在者との二義論」として，批判的な観点から定義されている。近さは，こうした二義論に基づく存在の活動を越えて，他者へと暴露された自己の根本受動性を意味することになる。しかし，以上のような定義は，それが身体性への具体的指示を欠くのであれば，なおも空虚なままである。まさにこの局面で，犠牲の主体を肉づけするという作業が遂行されねばならない。

第3章の議論を振り返ると，意志の転換劇において「苦しみ」という事象が大きな役割を果たしていた。第5章では，苦しみの厳密な身分規定があらためて問題にされる。意志を大きく変容させる苦しみの契機は，意志のカテゴリーに収まるも

のではなく，それより深層にある感性の領域に組み込まれる。意志に先立つ場で身代わりの意味を取り押さえるという企ては，苦しみを分析することから再出発しなければならない。そこでまずは，苦しみに代表される受動的諸現象を総称した「逆行性」の解明に着手する。この解明にとって重要な足がかりとなるのが，初期の『実存から実存者へ』と後期の『存在の彼方へ』とを繋ぐ「怠惰と疲労の現象学的分析」である。その分析を考慮するならば，逆行性の特色は「引き受けられない」と「取り戻せない」という二つの否定的形容詞に集約される。このような逆行性は，第 4 章で描かれた「近さ」の不可逆的な自他関係に接続されることで肯定的な意義を帯びてくる。それゆえ，以下では，苦しみの逆行的現象を他者との関係において論じ直すことが必要となるだろう。しかし，その前に，そもそも他者とはどのような意味で言われているのかを確認しておかねばならない。こうして本論文は「顔」という概念の再検討に入る。そして，顔の意味を表象の原理的不可能性と殺人の倫理的不可能性という二側面から分析した後，再び苦しみの分析に立ち戻る。ちょうど顔がその悲惨と裸出によって私に訴えかけるように，苦痛に囚われた他人もまた私に鎮痛と治療を求めてくる。こうして，他なる苦しみが私の意に反して逆行的に関わってくるのである。それまで私を孤立させていた私の苦しみは，他人の苦しみに対する苦しみとなることで，ようやく外部への内的通路を獲得する。そこ身代わりという概念のエッセンスが見いだされる。私へと収斂する苦しみの重層化は，自己身体の贈与として可能になるのだが，この場合の「贈与」とは，能動的に実施される善き行ないを指すというより，自己の内奥が他者へと剥き出しにされている実態，したがって贈与一般の原理的可能性としての贈与を指している。それゆえ，後期レヴィナスにおける犠牲の身体は，魂を内部に幽閉している墓場ではなく，魂を最も異質な他へと剥き出しにし，そのことでもって自身が病気・苦痛・死といったものにさらされるようになるという，極度に受動的で対外的な感受可能性の生成域を表現する。

だが，以上のような犠牲の思考は，たとえ身体論的に肉づけされたとしても，経験に適合した実情を織り込まないかぎり，真に具体的とは言えない。そこで，第 6 章においては，創世記で語られるイサク献供についての諸解釈を導きの糸としつつ，責任概念が引き起こす問題を考究する中で，犠牲の経験に内在的な矛盾点を明るみに出す。「倫理的なものの一時停止」によって信仰の領域へと飛躍したアブラハムの姿勢を評価するキルケゴールに対し，レヴィナスはこうした考え方を一種の暴力として批判した。レヴィナスによれば，宗教的なものというより倫理的なものが，神への忠実というよりイサクへの責任が，自我の単独化を可能にするのである。その解釈の背景には，「彼性」という術語を中心に構築された哲学的神論が控えている。それは，神との交わりよりも人への道徳的な配慮に神への随順を認めるような逆説的神信仰と一体のものである。しかし，このような神論の導入によって責任のアポリアが解決できるわけではない。純粋に人間的な次元に連れ戻されるとしても，ある他人と別の他人（「第三者」）との間で引き裂かれる場合，この両者に対して同時に責任を果たすということはできない。これはジャック・デリダによって鋭く指摘されたアポリア論でもあるが，レヴィナス自身がすでに「正義」という概念を通じてこのジレンマと格闘していた。正義の次元では，他者と第三者を比較する作業が強いられてくる。そして，そこには他者ないし第三者の排除・犠牲という深刻な事態が認められる。レヴィナスの無限責任論は，こうした犠牲に対する剰余責任をもあらかじめ包含することで，第三者排除の問題を乗り越えようとする議論であったと考えられる。それと同時に，後期レヴィナスにおける「疚しさ」という観念の重要性が強調されることになる。

本博士論文の結論は以下のとおりである。第 6 章で概観したように，正義が導入する存在論的領域の必然性に着目しつつ，近さの無始原的性格を撹乱させる脱構築的なレヴィナス読解は，犠牲の思考があらかじめアポリアをはらんでおり，決して純粋なものではありえないということを正しく示唆するものであった。しかしながら，本論文での考察を通じて，レヴィナスにおける倫理は，近さと正義からなる二元ばかりでなく，肉体の深層から発する二元によっても構成されていることが明らかとなった。他者に対する受動的な自己贈与は，内的な享受の毀損という仕方でしか成立しない以上，この享受をすでに前提としている。このように享受と苦しみからなる犠牲のアポリアは，ただ事後的にのみ意識内で反省されるといった類のものではなく，むしろ犠牲の身体の核心において，最も制御しがたい非表象的情感性のレベルで生じている。だとすれば，他者への受動的曝露そのものに伏在する受動的「自足」の可能性についても十分に考えてみるべきであろうが，それは，レヴィナス研究の枠組みを超えて果たされるべき別の課題である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

他者との関係の内に本質的な非暴力性，根底的な倫理性を見て取り，そこから西洋哲学そのものが抱え込む暴力性を告発しつつ，無限や超越の観念を現代において新たな仕方で鋳直そうとした特異な思想家。これがレヴィナスに関する一般的な理解である。それがレヴィナス哲学のもっとも目立った側面であることは間違いないが，この面だけを切り離してテーゼ化するならば，いかにも形式的で独断的な思弁に見えてしまうことは避けられない。だが，実際には，この哲学が繰り出す人目を引く主張は，地を這うような繊細で粘り強い思索によって支えられている。レヴィナス研究の成否は，ひとえにこの点を的確に把握し表現にもたらすことができるかどうかに掛かっている。

本論文は，このような課題に応えるべく，犠牲と身体性という二つの主題に即してレヴィナスの全思索を検討し，そこで問われる超越の「実質的な核」を掴み出そうとするものである。犠牲と身体性というアプローチは，一見意表を突くものであるが，レヴィナス哲学の公式的なテーゼを裏側で下支えしている次元に切り込むべく，周到な戦略的配慮の下で選ばれたものである。まず，他者との倫理的関係における自己の無限責任というレヴィナスの有名なテーゼを，自己の構造的な犠牲可能性の問題として組織的に読み替えていくことによって，非暴力としての倫理という定式の下では隠されてしまう「他性に由来する特殊な力」が浮き彫りにされる。これは自我の暴力をそれとして気づかせる暴力であり，ルネ・ジラールの犠牲論が暴き出すような第三項排除の暴力ではないが，それでもやはり，自我のあり方に転換を迫るある種の独特な力である。だが，さらに重要なのは，レヴィナスにおいては，このようなアプリオリな犠牲的自己の実質が，徹頭徹尾身体性のレベルで探査されているという点である。それゆえ論者は，レヴィナスの全思索を「徹底的な身体論的精査」にかけるという方法をとる。そうして人間の身体的存在の構造契機としての「苦しみ」へと考察を収斂させた上で，それが他者の苦しみの苦しみへと転換せざるをえない「犠牲の身体」であるという洞察に，レヴィナス哲学の核心を見てとるのである。

以上のような解釈の道筋を，論者はテクストの細部に至るまで厳密な検討を施しながら，強力かつ説得的に描き出していく。レヴィナスが次々と繰り出す奇矯な諸概念を，その哲学的・宗教的な背景を周到に押さえつつ読み解いていく手際は見事である。そして，他の哲学者や思想家との突き合わせや具体的な事例が，全く適切な仕方で論述のしかるべき箇所にはさみこまれている。こうして本論文は，レヴィナスの牽引力の強い文章に引きずられてレヴィナス語を振り回しがちな多くの研究とは一線を画して，レヴィナスの思索の深層で遂行されている事柄にまで考察を届かせ，その意義を読み解くことに成功している。これは若い研究者の仕事としては異例であり，きわめて高く評価すべきことである。

内容的に見て，本論文にはレヴィナス研究上画期的な意味をもちうる成果が数多く含まれているが，とくに注目すべき事柄として，以下の二点を挙げることができる。

第一に，レヴィナスの公式見解の裏側に回り込むかのような本論文のアプローチは，レヴィナス哲学の実質部分でありながら当人がその意義を十分に理論化できていないような事象へと肉迫することを可能にしている。そしてそこから，既存のレヴィナス論を再検討するための新たな視座が開き出されている。その代表例としては，デリダのレヴィナス批判を題材として第 6 章で組織的に展開されている考察が挙げられる。無限責任の主体を「言うこと（le dire）」として捉え，主題化可能な「言われたもの（le dit）」の手前に置こうとするレヴィナスに対して，デリダは両次元がはじめから矛盾的連関の内にあることを際立たせることによってレヴィナスの主張を揺さぶろうとした。デリダのこの批判は現今のレヴィナス研究において多大な影響力をもつものであるが，論者の身体論的精査は，この批判が定位している言語論的二元の手前に「肉体の深層から発する二元」の所在を突き止めることによって，この批判を相対化することに成功している。その上で，レヴィナス的な無限責任と絶対的無責任との決定不可能性を語るデリダの挑発的読解を正面から受け止めつつ，「責任の能動的履行に必然的な無責任を踏み台にした剰余責任」としてレヴィナスの無限責任論を救い出そうとする。この精密な論述は，本論文の白眉であると言ってよい。

第二に，犠牲と身体性という二つの主題の結びつきを探るという本論文の方法論は，現象学由来の超越論的考察と一神教的（とくにユダヤ教的）問題関心というレヴィナス思想の二つの局面について，その内的連関を鮮やかに浮かび上がらせることを可能にしている。身体論的なレヴィナス解釈自体は現象学的研究の分野では珍しいことではないが，そこではレヴィナスのユダヤ的側面が切り捨てられてしまいがちである。それに対して，「犠牲の身体」へと集約される本論文の解釈は，

現象学的要素とユダヤ教的要素を無理に結びつけるのではなく，レヴィナスの思索において両側面が接合せざるをえない必然性を，事柄に即して証示することに成功している。これはレヴィナス思想の包括的な受容のためには不可欠でありながら，これまでほとんど果たされてこなかった作業であり，この点でもまた，レヴィナス研究に対する本論文の貢献はきわめて大きなものであると言える。

本論文にあえて注文をつけるとすれば，レヴィナス哲学の実質的な核心を抉り出すことに力を注ぐあまりに，この哲学の通時的な展開に関する叙述がやや手薄になっている点を指摘することはできる。だが，それは本論文の独創性の裏面ともいうべき事柄であって，その価値を損なうものでは全くない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年12月20日，調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。